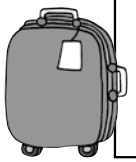
「茶旅」
“こぼればなし”

(2)

ハノイのエスプレッソ

コラムニスト　須賀　努



ベトナムの茶旅に最初に行ったのはもう6年も前になる。ホーチミンへ行き、『この辺に茶畑はないか?』と騒いでいたら、『バオロックへ行け』と言われ、車で行った思い出がある。バオロックは有名な避暑地、ダラットの手前にある小さな街。その郊外に大規模な茶園が広がっていた。『どこかで見たような茶畑だな』と思っていると、『ここは台湾企業が投資して作った茶園。全量台湾への輸出、名称は台湾高山茶です』と言われて驚いた。

ベトナムはコーヒーの産地としても有名だが、茶葉生産量もかなりある。これはフランス植民地時代の影響が大きいだろうし、その後も北ベトナムが共産化したため、ソ連からの経済援助の見返りに茶葉を供給した、という歴史もあるだろう。是非ベトナムの茶の歴史を知りたいと思い、3年前にはハノイへも飛んでいったのだが。

その頃、友人から『ベトナムで相当古い茶樹が見付かったらしい。中国より古いとの話もある』というので訪ねようとしたが、残念ながら時間の関係で樹齢５００年の茶樹を見るに留まった。勝手な言い方だが、昔は山の中には中国とベトナムの国境などはなく、その一帯には古くから茶樹があるということを確認した。

ハノイ郊外のタイグエン県も訪れた。日本人の中には、ベトナム人は皆蓮茶を飲んでいると思っている人もいるが、実はハノイなど北部では、相当に濃い緑茶をこのんで飲んでいるのである。それは何故なのだろうか?当時83歳の茶人の所へ行き、この緑茶のエスプレッソをご馳走になりながら、聞いてみたが、『昔からの習慣』という以外、答えは得られなかった。

ハノイでお茶屋の6代目を継ぎ、かつ著名なジャーナリストでもあるスオン氏を訪ね、同じ質問をしてみたが、答えは『ベトナムの茶の歴史は植民地支配や打ち続く戦争で資料が散逸してしまい、殆どわかっていない』のだという。店内には初代の女性が路上でお茶を売る姿を描いた絵があったが、それ以外、歴史的な物は見当たらなかった。

その後、香港で50年以上お茶屋を営んでいる店主にハノイのエスプレッソの話をしたところ、彼はこともなげに『それは潮州人の習慣だろう』という。潮州は現在広東省の一部だが、福建省南部と同じ文化圏に属し、タイなどに大量の華僑を輩出した場所である。そして香港あたりには今でも沢山の潮州料理屋があり、食事の前には必ず濃い鉄観音茶などが入った小さな茶杯が出て来る。まるで食前酒のような習慣がある。

確かに、ハノイのお茶はこれに限りなく近い。ではどうやって、この習慣がベトナムに入ったのだろうか。前述の老店主は『勿論生まれる前の話だからよくは知らないが、２００年ぐらい前に潮州あたりの人々が大量に海外に出た時期がある。その時、歩いて行ったんじゃないか?』とこれまたこともなげに言う。潮州からハノイ、どう見ても簡単に歩ける距離ではないのだが。

ハノイのお茶屋の6代目スオン氏

そういえば、タイのバンコクのチャイナタウン、ヤワラー。潮州人がマジョリティーのこの街も２００年の歴史がある、と言われていた。何か事件があり、人の移動が起こった時期なのだ、きっと。だがもう一つの疑問、『バンコクの潮州人は昔から殆ど茶など飲んでいなかった。何故なら彼らは食うことが出来なかったからわざわざ海外まで命を張って飛び出したんだ。そんな人に茶を飲む余裕などなかっただろう』というのがある。

海を渡って成功した華僑が後に故郷に錦を飾り、故郷の高級なお茶を飲んで、自らの成功を祝した、ということはあるかもしれない。今の潮州なら鳳凰単叢を飲むかもしれない。このお茶も香りはいいが、かなり濃い。ハノイでもそうだったのだろうか。ハノイ在住の華人に話を聞きたいと思ったが、ベトナムと中国は歴史的に見ても、犬猿の仲。35年前の中越戦争の折に、ハノイ在住の華人の多くはこの地を追われ、対岸の北海に逃げ帰っている。筆者の疑問に答えてくれる人を探すのは容易ではないが、逆に分からないから想像が膨らむ。

先日久しぶりにハノイを再訪した。お茶とは関係のない旅だったのだが、宿泊先から僅か5分の所にスオンさんのお店があり、突然劇的に再会した。彼が淹れてくれる極上のエスプレッソ緑茶を飲みながら茶談義をした。そして潮州人の食前茶の習慣を話すと『ハノイでも食事の前に濃い茶を飲む習慣はあります』というではないか。やはりそうだったんだ、この仮説、推測が確信に変わりつつある。

（すが　つとむ）